

イエスの救い(1)

人間の罪とイエス様の血潮の価値

ゴットホルド・ベック

聖書は私たちに理論や教えを伝えようとしているのではなく、事実を伝えようとしています。

聖書の中でもっとも大切な事実は、主イエス様のなされた救いです。私たちはこの事実を、頭の中に蓄えた知識として知っているだけでは駄目^{だめ}で、生活の中にその知識が満たされ、体験的に知っていなければなりません。このような知識は、頭の知識とは遠くかけ離れた知識であって、私たちの人格から切り離して考えることのできないほど内に深く浸透しているものです。私たちは今、末の世の暗黒の時代に生きています。私たちには岩のように堅いしっかりとした土台が必要です。その土台とは、今述べたような生活の中にしみこんだ知識、聖書が伝える神の永遠に変わらない事実

でなければならぬと確信しています。

では、神の永遠に変わらない私たちに對するご計画とはいったいどのようなものでしょうか。ここで一緒に考えてみたいと思います。

1 神のご計画

はじめにみことばを二箇所読みましょう。

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。(ヨハネ 6:40)

みことばに「子(イエス・キリスト)を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つ」と書いてあります。良い行ない

をして一生懸命努力する者が永遠のいのちを持つ、とは書いてありません。イエス・キリストの十字架における救いのみわざを見て受け入れる者が、皆、例外なく永遠のいのちを持つとイエス様ははっきり約束してくださいましたのです。それが神である「父のみこころ」だ、と言われました。また、神様のご計画のもう一つの面を考えなければなりません。パウロはガラテヤに住んでいるクリスチャンたちに次のように書き送りました。

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。(ガラテヤ 4:19)

神様の私たちに對するご目的は、私たちが罪から救われること、そして神の子とされた者が、神のひとり子、すなわち主イエス様の御姿に似せられていくことです。

私たち一人ひとりには自分の強い点、また弱い点を

知っています。あなたは信者となつてから主のみこころに適う勝利の生活を願ひ、そのために祈つてこられたことでしょう。けれども、その結末は敗北に終わってしまっていないませんか。一体どうしてでしょうか。ま

ことの土台を持っていないせいでしょうか。聖書の知識が足りないせいでしょうか。

人間には多くの悩みや苦しみがあります。それに対する神の備えは、いつもご自身のひとり子である主イエス様です。英語でよく言われる「Christ is the answer」です。それは私も知っている、とおっしゃるかもしれませんが、もしそれを知っているなら、なぜ、自分の力で勝利の生活を送ろうと努力するのでしょうか。主イエス様だけが、私たちに勝利の生活を送らせることがおできになります。

パウロは自分の信仰生活において、勝ち得て余りがあると証ししています。

私たちは、私たちを愛してくださいました方によつて、こ

イエスの救い(1) 人間の罪とイエス様の血潮の価値

れらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。
(ローマ 8・37)

パウロは勝利の秘訣を握っていました。それは、ガラテヤ人への手紙にあるとおりです。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。
(ガラテヤ 2・20)

私たちは自分自身で勝利の生活を送ることはできません。私たちの内に住み給うイエス様だけが、勝利の生活を送らせてくださるのです。ですから、私たちの内にイエス様の似姿が形造られてくるということが、本当に大切なことなのです。

あなたは、主はどうして私をこのような環境の中でお取り扱いになるのだろう、私にはどうしてこんなに悩みがあり、苦しみがあるのだろう、と思ってい

らっしゃるかも知れません。それは、あなた自身が死んでなくなり、あなたの内に主イエス様が生き給うという真の知識に達するよう、神様が導いておられるからです。

私たちはいろいろな願いをもっていますが、主である神はそれにお答えになるときに、「イエス様」をお示しになります。その他のどのような方法もおとりになりません。それでイエス様がどういうお方かを知るために、今から少しだけ「人間の罪の三つの側面」と、「イエス様の流された血潮の三つの働き」について考えてみたいと思います。もちろんこれらについても、やはり理論や教えは大切ではありません。事実が問題となります。神のことは私たちの罪と主イエス様の血潮の価値を次のようにはつきりと述べています。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というの

は、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。
(ローマ 3・25-26)

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。
(ローマ 5・8-9)

2 人間の罪の三つの側面

まず人間の罪について考えるとき、罪には三つの側面があると言えるでしょう。それは、神も、人も、悪魔も、人間の罪の事実を認めているということなのです。

最初の人アダムが神に対して不従順であったために、

イエスの救い (1) 人間の罪とイエス様の血潮の価値

神と人との間に隔たりができてしまいました。すなわち、不義と罪が、神と人との間を隔てたのです。聖書に明確にそう書き記されています。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。
(イザヤ 59・2)

ですから神が、全人類はことごとく罪の下にある、と言っておられるのです。ローマ人への手紙3章にも、次のように書かれています。

では、どうなのでしょう。私たちは他の者にまさっているのでしょうか。決してそうではありません。私たちは前に、ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い

出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもない。」（ローマ 3・9-12）

これは、生きておられ、人間の心の奥底を完全に知っておられる神の判断です。また罪によって神に対して隔ての壁ができてしまっただけではなく、人間の内側に「良心の呵責」も生じてきたのです。罪を犯し、神との間に隔たりができたために人間には良心の呵責が生じました。神の霊、聖霊なる神が人の心に働くとき、人間はことごとく罪の下にあることを悟り、自分は罪を犯したと認めるのです。聖書の中で放蕩息子が次のように告白しています。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」（ルカ 15・18）

私たちは良心の呵責をもっています。悪魔はそれに

つけこみ、人間に対して、お前は罪を犯した、駄目な罪人だと言います。

悪魔は訴える者、告発する者としてヨハネの黙示録に書かれています。

そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの權威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。」（黙示 12・10）

このように神も、人間も、悪魔も、人間の罪の事実を認めています。ですから、私たちが真の自由を得るためには、これら三つ「神に対する罪」、「自分の内側にある良心の呵責」、「悪魔の訴え」のすべてを解決することが必要です。

では一体どうしたら、この三つの問題を解決することができのでしょうか。解決はイエス様にあります。

3 主イエス様の血潮の価値

人間のあらゆる困難、苦しみに対する神の答えはいつもただ一つ、すなわちご自身の御子、主なる神、イエス・キリストにある、ということをはじめにお話ししました。今述べた罪の三つの問題も、もうすでに主イエス様によって、その犠牲によって、解決済みです。

神と人との間を隔てている罪という名の壁は、主イエス様の血潮によってもうすでに取り除かれました。隔ての壁は廃棄されたのです。それによって神のご臨在の中に入っていくことが可能になりました。神との交わりが回復され、人は再び神と交わるようになりました。ですから、イエス様の十字架の血潮の価値をよく知るならば、私たちの良心の呵責は消えてなくなり、罪の赦しを得た喜びと平安を自分のものとすることができます。さらに私たちが主イエス様の血潮の価値を深く知るなら、たとえ悪魔が訴えても、神が満足しておられるのですから効き目がなくなります。このように、主イエス様が十字架で流された血潮の力は、

イエスの救い（1） 人間の罪とイエス様の血潮の価値

無限に価値あるものなのです。神に対し、内側の良心の呵責に対し、また悪魔の訴えに対して、十二分の効果を持っています。

私たちが霊的に進歩し、成長を遂げたいなら、どうしても主イエス様の血潮の限らない力を知る必要があります。主イエス様が十字架にお架かりになり、その時、流し給うた血潮の絶大な価値を知らなければなりません。このみことばの知識なしには、イエス様にお従いすることはできないからです。それでは、この三つのことをもっと詳しく学んでみましょう。

・血潮は神の満足のために流された

第一番目、イエス様の流し給うた血潮は、まず、主である神様のために流されたということを知る必要があります。

もちろん主イエス様の血潮は、私たちの贖いのために流されました。私たちの罪が赦されて、私たちが主である神に仕えるように流されたのです。罪人である

私たちが神にさばかれないためには、どうしても罪の赦しと贖いが必要です。この罪の赦しは、他の宗教、また理論や教え、道徳的に良い行ないによつては得られません。ただ、主イエス様の流し給うた血潮の事実によつてのみ、罪の赦しがなされます。

しかし、主イエス様の血潮はまず、主である神のために流されたのであり、私たちのためではありませんでした。もし、私たちが主イエス様の血潮の価値を知ろうとするなら、私たちは最初に、主である神がイエス・キリストの血潮をどのように考えておられるか、知らなければいけません。

もし私たちが、神がイエス様の血潮の価値をどのように考えておられるかを理解しないなら、イエス様の血潮が私たちにとってどんな意味があるかもわからなはずです。御霊様が、神が御子の血潮をどのようにお思いになっているかを私たちに教えてくださるときはじめて、私たちはイエス様の血潮の尊さを知ることができます。

旧約聖書を見ますと、「(ささげ物の)血」という語が百回以上出てきますが、どの箇所においても、この贖いの血は神のためのものだと言っています。

さて旧約時代における一番大切な日は、贖罪の日であつたと思われまゝ。レビ記16章は贖罪の日のことを詳しく伝えています。

アロンは民のための罪のためのいけにえのやぎをほふり、その血を垂れ幕の内側に持つてはいり、あの雄牛の血にしたようにこの血にもして、それを『贖いのふた』の上と『贖いのふた』の前に振りかける。彼はイスラエル人の汚れと、そのそむき、すなわちそのすべての罪のために、聖所の贖いをする。彼らの汚れの中に彼らとともにある会見の天幕にも、このようにしなければならぬ。彼が贖いをするために聖所にはいつて、再び出て来るまで、だれも会見の天幕の中にはならない。彼は自分と、自分の家族、それにイスラエルの全集会のために贖いをする。

(レビ 16:15-17)

ではなく、ご自分の血によつて、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。

(ヘブル 9:11-12)

贖罪の日には、すべてのイスラエルの民が幕屋の前に集まり、自分たちの罪のために身代わりの子羊を殺します。その血潮は、大祭司が神の臨在し給う至聖所に携えて行き、それを『贖いのふた』の上と前に七度振り注いだと記されています。(『贖いのふた』の上の雲の中に神が現われるので、そこに勝手な時に近づくことは禁じられていました。)犠牲の子羊は幕屋の前庭ですべての民が見ている前で殺されます。しかし、その血を至聖所に携えて行くことが許されているのは、大祭司だけでした。大祭司は民の罪を贖うために、血を携えて主の御前に出て行きます。

この大祭司は主イエス様の雛形です。ヘブル人への手紙9章11、12節を見るとよくわかります。

しかしキリストは、すでに成就したすばらしい事からの大祭司として来られ、手で造った物でない、言い替えれば、この造られた物とは違った、さらに偉大な、さらに完全な幕屋を通り、また、やぎと子牛との血によつて

大祭司が一人で神の臨在し給う至聖所に入ったと同じように、私たちの救い主イエス様も一人で十字架にかかり、血潮を流され、三日目によみがえり、天の父なる神のもとに贖いの血潮を携えて行かれました。大祭司はきよめの血潮を携え、全会衆から離れて、まず、神の御前に行きました。神はその血潮を見て満足されました。これを見ても、血潮は第一に神のためのものであることがわかります。主の贖いのもう一つの雛形は、出エジプト記12章13節に見られます。

あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。(出エジプト 12:13)

イエスの救い (1) 人間の罪とイエス様の血潮の価値

エジプトを出るにあたり、イスラエルの民はみな傷のない子羊を殺してその血を家の二本の門柱と鴨居に塗らなければなりません。神はその血を見て、その家に災いをくださず、その家を通り過ぎる、と言われました。イスラエルの民が家の入り口の見える所に血を塗ったのは、主である神がその血を見られるようにするためでした。神のさばきが過ぎるまで、人々は家の中で殺した羊の肉を焼いて食べていました。家の中にいる人々にはその血は見えませんでした。この出エジプト記の過ぎ越しに際し、イスラエルの民が殺した、傷もしみもない子羊は主イエス様の雛形です。主である神は、極みまで聖であり、義であられますので、罪ある人間を贖うためには、罪のないものを罪あるものとする必要があったのです。血を流す、ということはいのちを与えるということです。なぜなら、いのちは血にあるからです。

ヘブル人への手紙9章22節には「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです」と書いてあります。

主イエス様がいのちを捨て、血潮を流されたとき、神はその御心を満足されました。「わたしは血を見るならば、災いをくださず通り過ぎるであろう。わたしはわたしの子、イエス・キリストの血潮を見るなら満足する」と、主なる神は言われます。これこそ、私たちが知らなければならぬ、主である神の永遠に変わることはない事実なのです。

・血潮によって良心の呵責は消え去る

主イエス様を信じて救われる前は、私たちの良心は曇って死んだようなものでした。けれどもキリスト者とされたいま、自分が神に不従順であるとき、それが罪として私たちの良心に敏感に響いてきます。そのようなとき、私たちは自分ばかりをみつめ、主イエス様の血潮の価値を忘れて、気落ちしてしまいます。私たちの罪がイエス様の血潮よりも大きいかにように、考えてしまっているからです。

私たちはどうしてそんな風になってしまっているのでしょうか。

うか。私たちは、何かをこの身に感じたいのです。そしてその感じ方により、主イエス様の血潮の価値を判断したいと思っています。これは大変な誤りです。血潮はまず、主である神のために流されました。イエス様の血潮が主なる神にとってどれほど完全な価値を持っているか、を知る必要があります。私たちの感じることとは大切ではありません。神のことばを心の底から信じるのが大切です。

私たちは主イエス様の血潮の価値を信じなければなりません。なぜなら聖書は次のように言っているからです。

「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」

(1ペテロ 1:18-19)

「あなたがたが…贖い出されたのは、キリストの尊い血によった」と書いてあります。主である神が、御子イエス様の血潮は人間のすべての罪を取り除くのに十分であるとみなされたことを悟ることが大切です。これによって、神と人とを隔ててきた罪の壁がまったく取り除かれていることを、信じることができるわけです。まず神がそうおっしゃったのですから、私たちはそう信じるができるのです。

私たちの信仰の土台は、神の言われるみことばです。神の御約束です。主である神は聖であり義であられます。その神が、イエス様の血潮はすべての罪をおおうために十分である、と言っておられます。この血潮の価値により、信者が神のご臨在に入ることが可能となりました。主イエス様の血潮の価値をよりよく悟るなら、私たちの良心の呵責は消えてなくなります。神は主イエス様の血潮に心から満足されました。このイエス様の血潮は私たちにとっても十分であるはずで、聖書は次のように言っています。

そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

(ヘブル 10:22)

このみことばは、一体何を意味しているのでしょうか。いままでは、主である神と人を隔てていた罪という名の壁がありました。ですから絶えず良心に咎をおぼえて苦しんでいたのですが、いまや主イエス様の犠牲の血潮が流され、この罪の壁は取り除かれ、贖われ、良心の呵責は消え去ったのです。もし、私たちがこの永遠に変わらない事実の上に立つなら、私たちの良心の呵責は跡形もなく、消え去ってしまうのです。

信仰生活には、二つのことがいつも並行していなければなりません。それは、信仰に満ちた心と、咎めの消え去った良心です。もし、咎めの消え去った良心を常に持ち続けることができないならば、私たちの信仰生活は前進しません。ですから私たちは日々、時々

刻々、イエス様の血潮の無限の尊さを味わい知らなければならぬのです。

私たちは祈るとき、何を土台にして祈っているのでしょうか。イエス様の血潮でしょうか。それとも他の何かでしょうか。私たちは聖さが必要であり、主イエス様の血潮をくぐって初めて、大胆に主である神の御前に近づくことができるということを、いつも考えているのでしょうか。それとも、きょうは一日穏やかに過ごした、主のために何か行なった、満足だ、ということから祈り心が湧いてきて、そのような気持ちや気分を土台に祈るのでしょうか。もし、気分を土台に祈るなら、それは絶望への第一歩と言わなければなりません。なぜなら、気分の良い日は一週間にそんなにたくさんはないからです。良心の平和は気分の上に成り立つものではないからです。良心の平和は流された主イエス様の血潮を受けるときにのみ、良心の平安があるのです。このことを知ることは本当に大切なことです。ヘブル人への手紙10章19節にこう書いてあります。「こういうわ

けですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです」。血によって、大胆に主の御前に近づくことができます。

またあるときは、きょうは注意深く一日信仰生活を送った、いつもより多く祈り、多く聖書を読み、主の御前で黙想のときを長くもった、だから喜んで主の御前に近づくことができる、と思う人がいるかもしれせん。またこんなこともあるでしょう。朝食のとき、家族と何かでいさかいをし、面白くないことがあったり、また朝、目を覚ましたとき気分が優れず、主イエス様との関係が何か思わしくないように思えて、きょうはよく祈れないということもあるでしょう。

愛する兄弟姉妹よ、私たちは何を理由に、何を盾に取って神に近づくのでしょうか。定まりのない、揺れ動く私たちの感情をもとにして主に近づくのでしょうか。それとも岩のように動かない土台、すなわち主イエス様は私たちの罪のために血潮を流された、神はそれを心から受け入れ満足し給うた、という永遠に変わ

らない事実に基づいて神に近づくのでしょうか。

私たちがいくらむきになり必死で祈っても、主は聞き入れ給いません。ただ、主イエス様の血潮をくぐって神に近づくときにのみ、主はその祈りを聞かれます。主イエス様の血潮は永遠に、その力を失いません。ですから私たちはいつも主の血によってはばからずに、しかも喜びをもって神の御前に近づくことができます。私たちが何かやったからではなく、ただ、主イエス様の流された血潮のゆえに主なる神の御前に出ることができなのです。

たとえ私たちがおととい、昨日、きょう、どんなにすばらしい経験をしたとしても、それをもとに、神に近づくことはできません。ただ、流された主イエス様の血潮をくぐってのみ、主なる神の御前に出ることができるのです。きょうは良い日だった、昨日は良い日だった、というその気分によって神に近づき得ません。主イエス様の贖いの血潮によってのみ、近づき得るのです。

私たちがイエス様を受け入れたとき、主の血潮を信じたとき、神との間を隔てていた罪の壁は取り除かれました。主イエス様の血潮によって、まったく取り除かれました。聖書に「しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです」(エペソ2:13)と書いてあります。キリストの血によって、あなたがたは近い者とされたのです。しかし、キリスト者となったいまも、やはり、ただ一つの理由をもって、すなわち、イエス様の血潮のゆえに神に近づくことができるのです。

こういふわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができますのです。

そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づくこ

うではありませんか。

(ヘブル 10:19、22)

このエペソ人への手紙、ヘブル人への手紙のことはを見るとわかるように、信仰生活の第一歩はイエス様の血潮によって踏み出されますが、信仰生活の第一歩、一歩もイエス様の血潮によってのみ歩むことができるのだということを、忘れてはいけないと思います。

これまで繰り返し、重ねてイエス様の血潮のことをお話しましたが、それは信仰生活の一番初歩のことだ、それはもうわかりきったことだ、信仰のABCではないかと言われるかも知れません。けれども、困ったことには、人間はその一番の基礎を忘れやすいのです。

愛する兄弟姉妹よ、本当に覚えていていただきたいことは、死に至るまで、やがて天に召される日まで、このイエス様の血潮によって歩み続けなければいけないということです。

主イエス様の血潮は流されました。父なる神はこれをまったく良しとなさいました。ですから、イエス様

の血は私たちにとっても十分に価値あるものです。

私たちは弱い存在です。弱いところをたくさんもっています。けれども、その弱いところを見ているだけでは決して強くなれません。また、私たちは、この群れが祈りに乏しいと思うかもしれません。しかし、そう考えているだけでは何にもなりません。はばかりことなく、恵みの御座に近づきましょう。そして主に、「イエス様、私は流された血潮の価値をよく知りません。それでもあなたは、それを良しとされました。ですから、血潮は私にとっても十分であるということ相信我します。血潮をくぐって御前に近づきます」と言いましょう。このようにして主に近づくと、良心の咎は消え去ります。良心の咎が消え去ると、私たちの内には大胆さが湧き上がってきます。

ヘブル人への手紙に「もしそれ(完全にすること)ができたのであれば、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかつたはずであり、したがつて、ささげ物をすることは、やんだはずです」(10:2)

イエスの救い (1) 人間の罪とイエス様の血潮の価値

と書いてあります。「もはや罪を意識しない」とありますが、これは主イエス様の血潮の価値を深く体験してはじめて言えることばです。そんな人々にとつて、主イエス様の血潮に対する知識は、各々のいのちとなっています。頭の中に蓄えた知識ではありません。このような人々はパウロやダビデと共に、「主が罪を認めない人は幸いである」(ローマ4:8)と言うことのできる人です。最後にイエス様の血潮の価値の第三の点について、少し考えてみましょう。

・血潮は悪魔の訴えを無効にする

主イエス様の血潮によって、罪という壁は取り除かれ、良心の呵責は消えてなくなったただけではなく、私たちが主イエス様の血潮の価値を深く知るなら、悪魔の訴えは効き目がなくなります。兄弟を訴える者、つまり悪魔に対する主イエス様の血潮の勝利について、最後に考えて終わりたいと思います。

イエス様に属する者を訴えることは、こんにち、悪

魔のする一番大切な仕事の一つです。私たちはどうしても、いったい悪魔に打ち勝つことができるのでしょうか。

主イエス様の血潮によつてのみ、悪魔に勝ち得ます。主イエス様の血潮はもうすでに流され、もうすでに神と人との間を隔てていた罪の壁は取り除かれました。そしていまや、神は人間の側に、味方となって立っておられます。ですからどんなに悪魔が訴えて来ても、その訴えは虚しいものです。もし私たちが主イエス様の血潮をしつかりと信じるならば、そうです。ヨハネの手紙第一にこうあります。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(1ヨハネ 1:7)

このみことばは私たちの毎日の信仰生活にとつ

えられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。

(ローマ 8:31-34)

なんとという素晴らしい真理でしょうか。愛する兄弟姉妹よ。血潮は神が完全に満足されたものである、という知識が必要です！

悪魔がやってきて訴えて言います。「お前は罪を犯した。主はもはやお前を用いないであろう」と。このようなとき、悪魔の訴えに耳を貸すと敗北に終わります。なぜ、私たちは悪魔のことばを信じるのでしょうか。それは私たちが、まだ自分の内に何か良いものが残っていると考えているからです。私たちが自ら行なうことができることは、罪ばかりです。それ以外の何物もありません。これを深く知らなければなりません。この事実を認めるなら、サタンがやって来て「お前はまた罪を犯した！」と責めたとき、「それは前からわかつている。私の内にはなんの良いところも

イエスの救い (1) 人間の罪とイエス様の血潮の価値

て、なんと尊いみことばでしょうか。「すべての罪から」、各々の罪から私たちをきよめると書いてあります。「神が光の中におられるように」、私たちも主の光のうちに歩むならば、私たちの罪は大小にかかわらず、意識する意識しないにかかわらず、すべてきよめられていると言っています。ですから、悪魔は訴えても無駄です。サタンがどんなに訴えても無駄です。主イエス様の血潮のゆえに、いまや神が、私たちの味方となっているからです。ローマ人への手紙8章を読みましょう。

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といつしよにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみが

ない。しかし、私のためには主イエス様の血潮がある。神様はこの血に満足しておられる。だから私ははばかりことなく神の御前に祈ることができます」と言えるはずだ。

もし私たちがこの主の血潮の価値を忘れると、悪魔が勝利を得て出しゃばつてきます。主だけが、訴える者である悪魔に打ち勝つことができるのです。主はもうすでにイエス様の犠牲の死によつて、打ち勝たれました。もし、私たちが主の血潮の価値を十分に知るなら、悪魔がつけこむ隙はまったくなくなるはずだ。主の血潮を私たちの目の前から決して追いやってはいけません。主イエス様の血潮は神の満足なされたものであり、主イエス様の血潮は私たちの平安の源でもあります。この事実は悪魔の訴えを完璧に退けます。

愛する兄弟姉妹方よ、私たちの力と平安と喜びの源は、すべて、主イエス様の血潮の中に含まれています。主イエス様の血潮を深く喜び、主の血潮に心からの感謝を捧げて、さらに一歩前進したいものです。

種まきのたとえと私

イエスは多くのことを、彼らにたとえ話して聞かされた。「種をまく人が種^{タネ}時^{タネ}に出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると鳥が来て食べてしまった。また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が

深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし、日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。また、別の種はいばらの中に落ちたが、いばらが伸びて、ふさいでしまった。別の種は良い地に落ちて、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結んだ。耳のある者は聞きなさい。」(マタイ 13:3-9)

ユダヤの人々は、生けるまことの神様を信じる信者でした。しかし、イエス様が地上におられた時、新約聖

書はありませんでした。イエス様は旧約聖書しか知らないユダヤの人々に、ユダヤ教という宗教が教えるものとは違う、主なる神の本当のみこころを教えようとなさいました。

きょうは、種まきのたとえから、私たちに向けられているイエス様のみこころを知りたいと思います。

最初に、イエス様は、なぜたとえでお話になったのか、ということです。

わたしが彼らにたとえ話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。(マタイ 13:13)

イエス様は、見ても見ず、聞いても聞かない人たちに、たとえでお話しになりました。

大切なことは、まず人を話に引き込むことです。真剣に聞こうとしない人の関心を引き付けるには、難しい話よりも、たとえのほうがよいとお考えになったのだと思います。しかし、それだけではないと思います。それは、直截^{ちよくせき}に語られたものよりもたとえの方が聞き手の想像力を刺激し、理解に幅と深みをもたらすからではないかと思います。

種まきの話の内容は、イエス様ご自身が説き明かしておられます。

御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困

難や迫害が起ると、すぐにつまずいてしまいます。また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。ところが、良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いてそれを悟る人のことで、その人はほんとうに実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。

(マタイ 13:19-23)

最初は道ばたです。道ばたに落ちた種は、鳥に食べられてしまいました。種は、御国のことばです。ヨハネの福音書1章14節には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」とあります。また、黙示録19章13節には、イエス様のことを「神のことば」と記しています。ですから、種は、真理のことばを意味するにとどまらず、イエス様ご自身を指すと考えられます。

「道ばた」とされた人たちは、旧約聖書のことばを聞いていましたし、それが神様のことばであると信じて

種まきのたとえと私

いました。ほとんどのユダヤ人は、自分は神様のことばを知っている、と思っていました。しかし、イエス様は、聞いているかどうかではなく、聞いて悟っているかどうか、言い換えるなら、みことばを自分のものとしているかどうか、を問題にしました。あなた方は、神様のみことばを本当に知っていますか、と問いかけられました。

パリサイ人やサドカイ人たちがみそばに寄って来て、イエスをためそうとして、天からのしるしを見せてくださいと頼んだ。しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「あなたがたは、夕方には、『夕焼けだから晴れる』と言うし、朝には、『朝焼けでどんよりしているから、きょうは荒れ模様だ。』と言う。そんなによく、空模様の見分け方を知っているなら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。悪い、姦淫^{かんいん}の時代はしるしを求めています。しかし、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」そう言って、イエスは彼らを残して

去って行かれた。

(マタイ 16:1-4)

パリサイ人とサドカイ人は、聖書をよく知っていました。しかし、典型的な「宗教の人」でした。イエス様のところに来たのはイエス様を試すためでした。このような人たちは、自分の考えに自信を持っています。自分はわかっている、という態度ですから、目も耳も開かれませんか。イエス様がお語りになつてゐることを悟ることはなかったでしょう。もちろん、イエス様を個人的に知ることはありません。

問題は、悪いものが来て、その人の心にまかれたものを奪っていく、ということです。真理のみことばを聞くことが、かえって悪いものの働く機会となるのです。

聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直つてあなたがたを引き裂くでしょうから。

(マタイ 7:6)

残念なことですが、神様のみところは、だれもが受け止められるものではありません。飢え渴きがなければ、受け止めることはできません。むしろ真理に照らされて、心の内にある罪があぶり出されます。

持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。

(マタイ 13:12)

イエス様の時代の大多数のユダヤ人は、生けるまことの神様を信じていたのですが、道ばたの心でした。彼らは、ユダヤ教という宗教を通してみことばを受け止めていましたから、真理に反発して、かえって悪くなるのです。同じようなことは、今日の教会にいる回心を経験していない信者にもあてはまります。道ばたの種のたとえには、人間の頑なさ^{かたが}に対するイエス様の悲しみが込められていると思います。

二番目は、岩地です。真理のことばであるイエス様を受け入れても困難や迫害がおこると、すぐにつまずく人たちです。イエス様は「あなたがたは、世にあつては患難^{かんなん}があります、しかし、勇敢でありなさい、わたしはすでに世に勝つたのです。」(ヨハネ16:33)とおっしゃいました。パウロは、そのことを経験しました。

兄弟たちよ。私たちがアジャヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

(2コリント 1:8-10)

パウロが証しているように、真理のみことばは、みことばに信頼する人にとって、どんな困難にも勝利する力です。しかし、困難に遭遇してつまずく人は、みことばの力を経験することはできません。エジプトを脱出したイスラエル人がそうでした。

全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。「私たちはエジプトの地で死んでいたらよかつたのに。できれば、この荒野で死んだほうがましだ。なぜ主は、私たちをこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たちの妻子は、さらわれてしまふのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにあって良くはないか。」そして互いに言った。「さあ、私たちは、ひとりのかしらを立ててエジプトに帰ろう。」

(民数 14:1-4)

イスラエル人は、エジプトを脱出することを通して

神様の力を体験したのですが、これから向かおうとするカナンの地についての報告を聞くと、神様のみこころを疑い、神様の權威によって立てられているモーセに反抗しました。彼らは、現実がすべてだと思つたのです。ですからパウロは、私たちが現実を見て動揺することがないようにと、次のように記しています。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるものもろの悪霊に対するものです。(エペソ 6:12)

このみことばが示すように、この世は暗やみの世界の支配者たちによって支配されています。ですから、イエス様を信じる者がこの世の憎しみを受けること、患難に遭遇することは当然といえます。イエス様の時代でもすでにユダヤ人たちは、イエス様をキリストと告白するものを会堂から追放すると決めていました(ヨハネ9:22)。このため、人々の中にはイエス様と交

わりを持つことを恐れた人がいました。

さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があつて、五つの回廊がついていた。その中に大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せていた。そこに、三十八年もの間、病氣にかかつている人がいた。イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知つて、彼に言われた。「よくになりたいか。」病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいます。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はすぐに直つて、床を取り上げて歩き出した。

ところが、その日は安息日であつた。そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きようは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」しかし、その人は彼らに答えた。「私を直してくださつた方が、『床を取

種まきのたとえと私

り上げて歩け。」と言われたのです。」彼らは尋ねた。

『取り上げて歩け。』と言つた人はだれだ。」しかし、いやされた人は、それがだれであるか知らなかつた。人が大ぜいそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。その後、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたはよくなつた。もう罪を犯してはなりません。そうでないともっと悪い事があなたの身に起こるから。」その人は行つて、ユダヤ人たちに、自分を直してくれた方はイエスだと告げた。このためユダヤ人たちは、イエスを迫害した。(ヨハネ 5:2-16)

病人は、三十八年間ものベテスダの池での生活から解放されました。イエス様と出会い、イエス様の力を体験しながら、ユダヤ人のことばを聞いて恐れました。イエス様と親しい交わりを持ちたいと思わなかつたのです。しかし本当は、彼はユダヤ人を恐れる必要はなかつたのです。次のみことばはそのことを明らかにしています。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10:13)

イエス様は脱出の道を備えておられます。イエス様に従う者は、罪と死の縄目から解放され、自由を獲得します。

岩地の信者とは、内容的には時代を超えて、迫害の中にある信者にあてはめることができます。困難や迫害はいつの時代にもあります。どのような時にもわたしに従ってきなさい、というイエス様の警告です。

三番目は、いばらの中です。いばらが伸びて成長を妨げたのですが、芽を出した苗は枯れたものではありません。実を結ばなくなったのです。岩地の場合は迫害

や困難があつて真理のみことばを捨てるのですが、いばらの中とは、信者でありながら、この世のことに心が捕らえられていて、イエス様との親しい交わりを持つていない人々のことです。

イエスはパンを取り、感謝をささげてから、すわっている人々に分けてやられた。また、小さい魚も同じようにして、彼らにほしだけ分けられた。(ヨハネ 6:11)

イエスは答えて言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。」

(ヨハネ 6:26-27)

イエス様のところにやってきた大勢の人々は、イエ

ス様が与えてくださった大麦のパンと魚を食べて満腹しました。食べて満腹したことは、みことばを喜んで聞くことを表わしています。道ばたとの違いは、福音の真理を拒絶しないことにあります。しかし、人々の関心は、この世的なものであつて、まことのいのちではありませんでした。イエス様は、その様な人たちであるラオデキヤにある教会に向かって仰せになります。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものはないと言つて、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

(黙示 3:17)

ラオデキヤの教会は、いつの間にかイエス様を外に追い出してしまつていました(黙示3:20)。そうなれば、教会は人間が中心とならざるを得ません。職業的宗教家があらわれて、教会を支配するようになるだけではなく、兄弟姉妹がイエス様と親しい交わりを持つ

ことを妨げていたのだと思います。兄弟姉妹もまた、職業的宗教家への偶像崇拜に傾いていたのかも知れません。そこに集う人たちの心は満ち足りていて、イエス様との交わりを持っていませんでした。イエス様は、ラオデキヤの兄弟姉妹に対して、熱心になって、悔い改めなさい、と仰せになります。

いばらの中とは、内容的には、現代の組織化された教会の信者です。ことばにも知識にも富んでいます、新しいいのちにある歩みをしない人々たちです。イエス様は、熱心になって悔い改めなさい、とお語りになつています。

最後は、良い地です。良い地とは、疑わずに真理のみことばを受け入れ、みことばに従う人々たちです。この人々は、二つのことを経験した人々たちです。

一つは、次のみことばにあるように、新しく生まれることです。

種まきのたとえと私

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」
(ヨハネ 3:3)

イエス様は、ユダヤ人の教師であったニコデモに、人は新しく生れなければ神の国を見ることはできません、とおっしゃいました。豊かな実を結ぶには、古い人がイエス様の十字架の死にあつて死んで、イエス様のよみがえりにあつて新しく生まれることがどうしても必要です。

豊かな実を結ぶために必要なもう一つのことは、御霊の導きです。

私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。
(1コリント 3:6-7)

たいせつなのは、成長させてくださる神です、とあります。豊かな実を結ぶには、御霊の導きが絶対的に必要です。御霊の導きによって私たちは、イエス様に似た者とされてゆきます。

実を結ぶ人たちは、特別な人たちではありません。自分の弱さ、惨めさを直視し、正直な心でイエス様のところに行き、イエス様との親しい交わりを持ち続ける人たちです。

イエス様は、そのような人の例として、心の貧しい人(マタイ5:2)をあげておられます。

イエス様は、種まきのたとえを通してみことばに対する信者の姿勢をお語りになりました。大切なことは、みことばの光に照らされて、私は良い地なのだろうか、もしかして、道ばたやいばらの地ではないだろうか、と吟味して、堅く信仰に立つ歩みを保つことではないでしょうか。

肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御

霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。
(ローマ 8:5-6)

主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(2コリント 3:17-18)



古田公人(吉祥寺キリスト集会)